



●足袋の色

皆さんは、足袋の色を問われれば何色と答えるでしょうか？大多数の方は、白足袋を思い浮かべることでしょう。なぜなら、結婚式や卒業式など正装の着物を着用する場合は、白足袋が一般的だからです。

その他に、昨年度の大河ドラマ『べらぼう～薦重栄華乃夢嘶～』を見ていた方はお気づきになっていたかもしれません、黒足袋の町人姿も見かけたのではありませんか？

江戸の町は、当時、当然ですが路面状況が悪く、道の砂ぼこりなど多かったため、汚れを嫌う町人の足袋は黒を履いていた人もいました。つまり、カジュアルなシーンでの着用です。

しかし、能舞台では、昔も現代も白足袋の着用が必須で、高い地位の武家の嗜みだったことが伺われます。身分や芸事の種類によつても足袋の着用色が変わります。

それでは、歌舞伎や狂言はどうでしょうか？これらは町人の娯楽だったため、色足袋もオーケーであり、現在でもその伝統は踏襲されています。歌舞伎の有名演目の主役である助六の足袋の色は黄色。狂言も足元をよく見てみると演目にもよりますが、黄色の足袋の時があります。
(幹事：昆野照美)

●日本の伝統的な色名 紅梅色

奈良と平安時代の和歌や物語に登場する花は、圧倒的に梅が多く、次いで桜と桃が続いている。「木の花は、濃きも薄きも紅梅」をはじめ、枕草子には梅が15回も登場する。

源氏物語には「紅梅裏の唐織の細長」、「唐綾の小紋の紅梅」、「紅梅色の紙」などの表現が見られる。

平安時代に発生し、完成された配色の文化に「かさねの色目」が挙げられる。染めや織の技術を取り込んだ平安ファッショングの配色システムで、表地と裏地の配色を指す「重ねの色目」、十二单の单衣の重ね方の「裏の色目」、織りの経糸と緯糸の組合せを指す「織りの色目」などがあり、その一部を紹介する。

单衣を二枚重ねる、梅に関わる重ねの色目の配色を示すと、「梅」という配色名は表白・裏蘇芳。「梅重ね」は表濃紅・裏紅梅。「裏梅」は表紅梅・裏紅。「紅梅」は表紅梅・裏蘇芳。「紅梅匂」は表紅梅・裏淡紅梅。「苔紅梅」は表紅梅・裏濃蘇芳。「今様色」は表紅梅・裏濃紅梅と細かく配色が指定されていて、平安の女性の感性が感じとられる。

紅梅色が、如何に平安女性に愛され、尊ばれ、多用された色名であったかが見て取れる。

(永田泰弘)

●大辞泉ひろいよみ 109一し

色道：しきどう。色恋に関する方面のこと。いろのみち。

色読：しきどく。書を読んで、文字に表された意味だけを解すること。体読。日蓮宗で、法華経を正しく読み取って実践すること。

色法：しきほう。仏語。物質的存在の総称。一切の存在するもののうち、空間的占有性のあるもの。心法。

色魔：しきま。色欲を満足させるために、次から次へと女性をだまし、もてあそぶ男。女たらし。

色盲：しきもう。色覚が全部または一部欠如している状態。赤と緑の色覚が欠けている赤緑色盲が多い。伴性劣性遺伝し、男性に現れやすい。

色目人：しきもくじん。中国元代、その治下にあったトルコ・イランなど西域地方諸民族の総称。モンゴル人に次ぐ準支配民族として重用され、政治・経済・文化の諸分野で活躍した。

色釉：しきゆう。→いろぐすり。

紫極：しきょく。(天帝の居る所の意の「紫微垣」から) 天子の居所。禁中。紫禁。

色欲・色慾：しきよく。男女間の性的な欲望。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)